

事務局より

事務局の氷見（ひみ）です。2010年4月から研究生として植物研に入学し、同時に本事業のお手伝いをさせていただくことになりました。

ケニアに行ったことは一度もないものの、建設会社に勤務している従兄弟がODAプロジェクトによるケニア・メルーの上水道整備のため4年間滞在していたこともあり、いろいろな話を聞いていました。（本事業で先生方が訪問されたムエア灌漑も、従兄弟が勤務する会社の別のチームが携わっていたそうです。）

2010年は、8月半ばからの2ヶ月間にケニアのジョモ・ケニアッタ農工大学からお二人の研究者が来日されました。ケニアは赤道直下ではあるものの、標高が高いため実際にはそれほど暑くはないそうなので、一番暑い時期に来日されてさぞ大変だっただろうと思います。それでもお二人ともわずかな期間で目を見張る成果を出されたので、ご本人はもちろんのこと、サポートされた先生方やそれぞれの研究室の方々がうまく連携して成果につながったのではないかと思います。

11月にジョモ・ケニアッタ農工大学で開催された国際セミナーは、現地コーディネーターである Murage 氏が中心に、プログラムの作成から経費に至るまで積極的に本事業の先生方（主に坂本先生）が関わり、日々電子メールのやり取りをしながらの作業となりました。国を超えて、しかも英語でのやり取りという作業は困難を極めました。領収書や航空券などはスキャンしてファイルを送るなど、実質的な距離はほとんど感じることなく、最終的には完成度の高い準備が出来たようです。また、今回参加された先生方の発表は、非常に高い評価を受けたという話を聞くにつけ、参加された先生方がそれぞれの研究発表に向けた実験および英語でのプレゼンテーションの準備に、全力で取り組んで頂いたためだろうと推察されます。渡航に係る手続きなどは事務局で担当させて頂き、出来る限りご多忙な先生方の手を煩わせないように努めました。それでもだいぶ先生方のお時間を割いてしまったのが反省点です。

思いがけない事務局の大きな特権は、先生方のご帰国後に報告レポートを最初に頂けたことでした。それぞれの先生方は大きく見れば農学系の研究者であるとはいえ、実際には専門分野が広範囲であるため、やはりレポートも独自の視点・切り口から書かれたものばかりです。先生方がケニアで見聞されたことが、温度そのままに追体験できるようなレポートばかりでした。

2011年もまた、農学研究という大きな武器をもった研究者が、地球規模の様々な難題という敵に向かって立ち向かっていくことになるでしょう。事務局としても、そのサポートに全力を尽くす予定です。